

【研究論文】

厨子甕の研究（1）
— 近現代厨子の編年 —

Research on unerary Urns (*zushigame*) [1]

— Chronology for the Funerary Urns of the Modern and Contemporary Periods —

宮 城 弘 樹

Hiroki MIYAGI

1. はじめに

筆者は、これまで前近代の御殿形厨子を中心に、型式学的検討を行い、赤焼、荒焼、上焼御殿形厨子の編年案を提示してきた（宮城2019・2020ab・2021・2022）。これらの研究は、厨子（蔵骨器）編年の主要器種の一つ御殿形厨子に主眼を置いたため、対となる甕形厨子の研究は、先行する研究に習ってきた。

一方、現在筆者が参加する奄美の古墓調査のプロジェクト^(註1)の中で、大量の厨子甕の調査を行う機会に恵まれた。この厨子甕は、近代から現代の資料で、現在その墓敷内における厨子甕の配置と被葬者、その順番や年代の検討を計画している。この作業の中で、埋設された近現代の厨子甕について、現在の分類よりももう少し細かい編年を提示し、その特徴を把握する必要が生じた。

そこで、本論では近代から現代のマンガン掛け厨子甕（以下「マンガン」）を対象とし、その細分編年案を提示することを目的とする。その方法はこれまでの研究同様紀年銘資料を定点とし、型式学的検討を試みることを考えた。しかし、この検討のきっかけとなった与論島の近現代墓の厨子には管見の限りだが記銘が確認されていない^(註2)。そこで、これまでの筆者集成の沖縄で報告される紀年銘厨子を用い、与論島の厨子とともに検討を行う。また、これに加えて与論島へ厨子甕を出荷していた生産者への聞き取り調査を行い、近代から現代まで壺屋で生産された厨子甕理解の一助としたい。

2. 研究略史

沖縄の厨子甕の本格的な研究は、1980年上江洲均の研究を端緒とする。上江洲は沖縄県立博物館等の1,000基前後の厨子を実見し、主に銘書資料を用い各形式^(註3)の年代等の整理を行った（上江洲1980、以下「上江洲編年」）。

上江洲編年の厨子分類は、厨子文化全体を包括するもので、素材、形態による分類を試み、後の厨子研究の基本的な枠組みをつくった。本論で扱うのは、主にマンガンとその系譜の延長にある沖縄産陶器（例えば青釉と仮称した資料を含む）で、以下これを総じてマンガンと呼称し、対象資料の検討を行う。

考古学研究として、文様・装飾の分類が発掘調査報告書でそれぞれ試みられている。その初期的検討として、上原静、下地安広により蓮華文および屋門などに着目した分類が行なわれた（上原・下地1985）。

中村愿は、正面の屋門形態について家形のものから位牌形に、口縁部断面の形状を長方形 → 三角形 → バチ形へ、文様が貼付から沈線へと変化するとし、大まかに三つか四つぐらいに区分できると指摘した（中村1989）。

西銘章はヤッチのガマの出土資料を分類するにあたり、マンガンの頸部が直立するもの、外に開くもの、頸部の屈曲がゆるやかなもの、蓋の摘などについて分類している（西銘2001）。

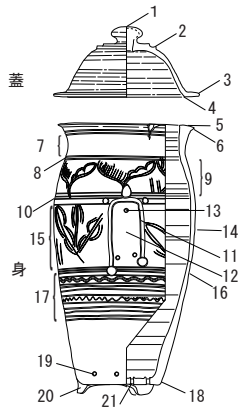
中村が示した変化の方向性について、属性分析を行い、年代比定をしたのは、安里進である。安里は浦添市教育委員会が実施する伊祖入め御拝領墓の出土例を検討するにあたり、1990年代後半まで調査されたマンガン82点を集成し、屋門、屋門飾、蓮華文、横帯（区画文）を分類しこれの組み合わせなどを用い属性分析している。これによって身を基準にVI期区分する編年案を提示した（安里1997、以下「安里編年」）。

那覇市でも銘苺墓跡（古墓群）をはじめとする墓調査が進展する。那覇市では本論対象のマンガンについて「陶製有頸甕形蔵骨器（庇付は軒付）」と呼称する（那覇市教育委員会1998・ほか）。那覇市の調査報告書ではいくつか詳細な分析が行われている。例えば、崎山古墓群ではマンガンの安里編年VI期資料を中心に屋門形態をⅧ群19類に、第3・4文様帯を数種に分類し遺構との出土状況などの検討を行っている（島2001）。銘苺墓跡の那覇新都心地区内出土紀年銘資料を36点集成、口径と器高の相関などについて詳細な検討を行っている（樋口2007）。

首里久場川ハタマチュウ古墓群では安里編年について「型式設定と年代を明確に示すものとして優れている。その内容の正確さについては、今までに他の研究者によって積極的に検証されてきたとは言い難い面もある（當銘2011: 48）」として、安里編年を批判的に分析し、課題点をあげる。例えば、安里編年では等閑視されていた底部の穿孔や脚など細部の属性について検討を行う。フクゼ山古墓群では肩部や胴部文様などに着目し、庇付（報告では軒付）の身肩部文様隊の幅が狭いものと広いものがあって、これが製作年代の時期差となる可能性を指摘する（當銘2019: 120）。他に、栗山初美による那覇市新都心を中心とする地域の出土厨子に関する考察（栗山2005）や、那覇市壺屋焼物博物館収蔵資料について、吉田健太によって紀年銘資料の紹介や溶着資料を用いた研究（吉田2013・2015）がある。

マンガンについての編年観は幾つかの修正点が必要とされながらも、おおよそ安里編年提示の区分が現時点の一つの到達点となっている。安里自身が調査に参加した浦添市（浦添市教育委員会2014・ほか）はもちろんだが、近年では沖縄県埋蔵文化財センターの調査などでもこれらの編年案が引用されている（沖縄県立埋蔵文化財センター 2022、ほか）。

これらの厨子甕調査の進展がみられる一方で、調査機関ごとに報告時の分類や部位呼称に若干の相違も認められる。この点は代表的な報告書の部位呼称を詳らかにした上で、本論における呼称を統一し、論を進めていきたい。本論で用いる呼称も仮称であり、これをもって統一を提案するものではな



	本論	伊祖入め	前田経塚(10)	ハタマテユウ	ヤッチのガマ	
資料名称	厨子甕	厨子甕	蔵骨器	蔵骨器	厨子	
資料名	マンガン掛け厨子 (略称：マンガン)	マンガン釉甕形厨子甕 (マンガン掛け焼締め厨子甕)	マンガン釉甕形	陶製有頸甕形蔵骨器 (略称：有頸甕形)	専用器／甕形 マンガン掛け	
蓋	1	摘	つまみ	つまみ	宝珠	
	2	座	つまみ台	つまみ台	基部（基台）	
	3	罫	罫	罫	縁部	
	4	かえり	かえり	かえり	キ	キ
	5	口縁部				口縁部
	6	口縁下	横帯 1	横帯 1	横帯 1	
	7	頸部文様帯			外面 I	
	8	頸部	横帯 2	横帯 2	横帯 2	区画文
	9	肩部文様帯	肩部文様帯	肩部文様帯	外面 II	
	10	肩部	横帯 3	横帯 3	横帯 3	
	11	屋門	屋門	屋門	正面示形	屋門
	12	銘書面	銘書面	銘書面		
	13	透かし	窓	窓	正面孔	
	14	胸部	胸部	胸部	胸部	胸部
	15	胸部文様帯	胸部文様帯	胸部文様帯	外面 III	
	16	腰部	横帯 4	横帯 4	横帯 4	区画文
	17	腰部文様帯	胴下部文様帯	胴下部文様帯	外面 IV	
	18	底部	底部	底部	底部・外面 V	底部
	19	胴下外面孔				
	20	脚			脚	
	21	底孔		底面孔	底面孔	孔
	本論	集成(1)報告書 NO.52	NO.41	No.18	No.129	

図 1 厨子甕の各属性の部位呼称一覧と本論の呼称
 図出典：前田経塚近世墓群（10）10号墓墓室No 2を加筆

いが、今後広い地域で検討を行うとともに、データベースなど電子化した際に検索して効果的に情報を収集する上では、遺跡報告の標記の不統一は必ずしも歓迎されるものではない。将来的には定義統一をするようにと提起しておきたい（図 1）。

3. 分析対象資料の概要

1) 与論島の厨子甕調査

本論執筆のきっかけとなったのは、与論島麦屋に所在する前浜墓地^(註4)の厨子調査である。筆者は、2022年8月20日～23日の日程で「奄美群島の葬墓制に関する考古学的研究（代表：関根達人）」の調査プロジェクトとして与論島の調査に参加した。与えられた課題は、厨子甕の年代観を示し、どの順番で配置されたかについて型式学的に検討を行う、というものであった。

与論島の葬制はおおよそ、次のように変遷すると理解されている。①自然洞穴墓：前近代の自然洞穴を利用する風葬地（＝与論ではこれを「ジシ」と呼ぶ）。②厨子甕埋設墓：近現代墓で、洗骨（＝与論ではこれを「カイソウ」と呼ぶ）後の遺骨を収めた厨子甕の埋設する墓地。③石塔墓：現代の火葬骨を収める納骨室をもつ墓石（竿石）が立つ石塔墓。①→②の変遷は明治11年（1878）に県から風葬禁止令が発令されて以降で、埋葬への移行は進まずに、県からの何度かの指導もあって、明治後期に埋葬が定着したと理解されている^(註5)。石塔墓は昭和53・59年（1978・1984）の設置年が多く認められる。今後②→③の改葬はさらに進むと考えられるが、特にこの変遷を決定付けることになったのは、2003年与論町宮の火葬場である昇龍苑が建設されたことが大きい。

今回の調査対象地の前浜墓地は近現代墓地（②）にあたる。

与論島の葬送に関しては、いくつかの民俗調査が知られている（近藤2004・金城2007・赤田1993・津波2007ほか）。これらを参考に本論にかかわる部分で簡単に記すと、死者が出ると墓地に埋葬し木製の小屋「ガンブタ」を添える。埋葬の数年後に洗骨が行われ、厨子に納骨して厨子甕の口縁を地表

に出した上で埋設される。甕を完全に埋めない理由については、いくつかの説明があるが、一例紹介すると完全に埋めてしまうと埋葬されたご先祖様は息ができず苦しいからと語られている。

明治後期（おおよそ1900年ころ）から県の指導もあって形式的には埋葬しながらも最終的には洗骨されたご遺骨は厨子に納骨され、墓域区画に甕が埋設され、厨子甕上半が並ぶ独特の墓地景観が形成された。葬送文化として定着した本墓墓制も、火葬場が登場（2003年）し、今大きく変容しつつある。おおよそ100年間営まれ、そして現在も墓参利用されているのが与論島の近現代墓（②）となる。

調査対象となった与論前浜墓地で厨子甕等が設置されている墓敷（区画）は東59、西50、合計109区画ある^(註6)。今回は本墓地でみられた埋設厨子甕^(註7) 332基のうち295基について検討する。その内訳はマンガン224基、青釉と仮称した鮮やかな青色、藍色の釉薬が施釉された厨子甕71基である。

分類にあたっては、マンガン掛け甕形厨子分類の先行研究として安里進による細分編年案（安里1997、以下安里編年）を追記および細分を行った。安里編年では、甕形厨子82点を検討対象とし、紀年銘資料などからマンガンは1790年代～1950年代に製作されたとし、6期に編年されている。蓮華文の貼付けはⅢ期以前の特徴で、Ⅳ期以降肩部（安里編年の黄帯3）は突帯文であるのに対して、Ⅴ期には肩部区画文が沈線になり、屋門はアーチ型へ変化する。さらにⅥ期は屋門が線彫りもしくは無文としている。安里編年の時期区分Ⅰ期・Ⅱ期・・・をそのままⅠ式・Ⅱ式・・・と標記する。この際、青釉を施釉する甕形厨子は沖縄の遺跡出土例にはみられないことから、仮にⅥ式に後続する現代厨子と捉え、Ⅶ式として類型化を試みた。これをまとめ図2のように分類し、与論島の厨子調査の初期的な分類を行った。

一方でこれらの資料を細分、型式認定するにあたっては、資料観察に際して制限があった。本資料は墓参の続く現代の墓であり、厨子甕は砂地に埋設されている。確認できるのは蓋と身の上半部、あるいは口縁が少しみえる程度の状態であった。また、ある甕は蓋の代替として使用されるタライに完全に覆い被さり、甕なのかどうか不明なものも少なくない。一部、改葬（墓終い）され墓敷内に横倒しになっていたために、底部まで観察できる状態にあるものもあったので、これを参考品として各資

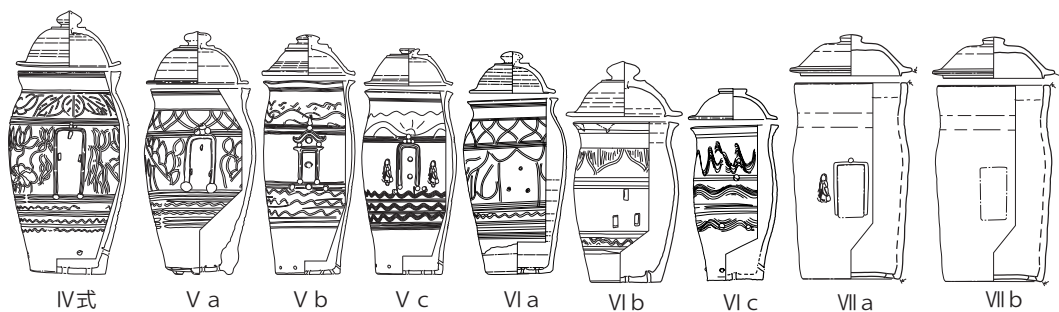


図2 与論島前浜厨子甕分類（縮尺任意）

模式図の図の出典は以下の文献を用い、一部加筆した。浦添市教育委員会2017『前田・経塚近世墓群10』那覇市2014『首里崎山古墓群』那覇市98集。那覇市2019『フクヂ山古墓群』那覇市109集。那覇市2011『首里久場川ハタマチュウ古墓群』那覇市84集

料の特徴を可能な範囲で分類した。なお、資料の現状を考え、蓋を分類することも一つの方法として考えられたが、本調査の目的が後に行われる民俗調査などと突合し、厨子甕の型式分類と被葬者や葬送順などとの関係を探ることを計画しているため、載せ替えなどが生じる可能性のある蓋ではなく、被葬者との関係理解のため身の編年を優先した。

2) 沖縄古墓調査出土紀年銘厨子

与論島前浜墓地の厨子甕は、安里編年V式を中心とする。また、VI式もわずかにみられるとともに、安里編年には位置づけられていない青釉の厨子甕（VII式）が加わることを紹介した。その理由については、沖縄で流通するVI式は、小型化したいわゆる火葬用または未成人用の小型の厨子甕であるため洗骨が続く与論では大型のものが利用されたのではないかと想定した。また、青釉のVII式は沖縄にもわずかに類例^(註8)を認めることができるが全く同じものではない。その理由としては、沖縄では洗骨が火葬に移行し、そもそも納骨器としての利用が途絶したため、洗骨文化が続く与論島で比較的大きい洗骨用の厨子甕が需要されたと想定した。

与論島の葬墓制の変遷を考えるとおよそ1900年頃から現在の厨子甕であろうと予想されるため、筆者集成（宮城編2020 a・b）に、若干さかのぼって1870年以降の紀年銘^(註9)を持つ資料約473点を抽出、型式学的検討を行うために実測図や写真図版によっておよそ分類が可能な264点を対象に分析を行った。なお、与論前浜墓地の例では庇付きの資料はなく、いわゆる火葬用骨壺とされる彩色するものも管見の限りはみられなかった。対象資料は量的に多くみられ、主に細分すべき対象資料はマンガンの年代観である。そこで、検討対象資料として付表の資料を用いた。図化されている対象資料、類例となる主なマンガンの紀年銘資料の散布図を図3に示した。

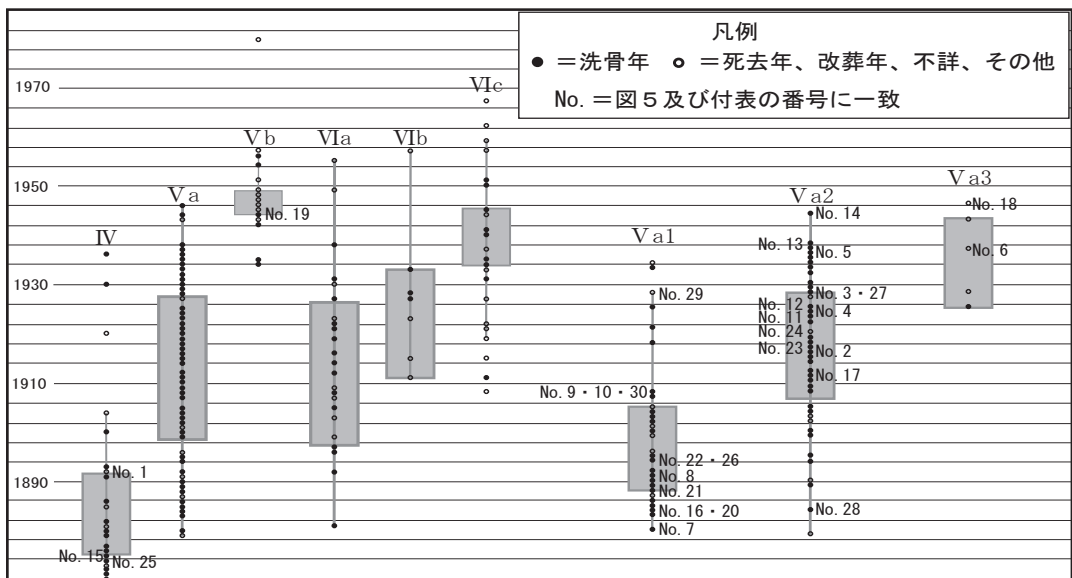


図3 マンガン掛け甕形厨子1870年以降の紀年銘資料散布図

安里編年ではIV式は1850年代～1890年代、V式は1900年代～1920年代とされる。安里編年V式の紀年銘資料は編年が提示された当初は5例だが、今回これに該当するV式146例を集成することができた。胴部文様帯の屋門左右に沈線文のあるものをV a (124例)、無いものをV b (22例)として2分類した。V cは僧形の貼付文である。V aの紀年銘資料そのものは、1879年のものを最古とし、1946年が最新紀年銘資料となる。V bは外れ値で1934年の資料があるものの、その主体は1940年代前半から1950年代の資料がみられ、おおよそ胴部沈線文が消失、即ち無文化する型式変化が推定され、その交代期は沖縄戦の年をおおよそ境としている。

さらにV aは器形から少なくとも二分、屋門透かしなどから三分することが可能と考えた。今回は、屋門の透かしの形態・配置を三分しVa1、Va2、Va3に細分し、同様に紀年銘を用い分析を行う。Va1はアーチ形屋門で方形孔が上位に配置される。Va2は隅丸方形ないしは円形孔や半裁竹管状工具による半月状の穿孔で銘書面の中央や下部に配置するもの、Va3はやや大きめの円形孔で銘書面および屋門外左右に穿つ資料と定義した。また胴の張りはIV式が肩の張る最大径胴上位にあるのに対して、最大径は型式変化とともに下がり、胴の張りはIV式に比してなくなる。Va3はほぼ寸胴の器形となりV bと類似する。本分類は2つの属性から型式変化の方向性が把握され、編年観はVa1が早ければ1880年代には登場し四分位範囲からその中心は1910年頃で、Va2は1910年頃～1940年頃、Va3は1940年代の前半頃に散布図がまとまり、おおよそ型式学的に想定した順序と整合する。

さて、与論前浜墓地の厨子甕は主にV式資料が主体となる。与論島のV式は戦後も陶器受容の増大に伴って用いられていたことが聞き取りなどから類推された。型式学的見地とあわせてIV→Va1→Va2・VIab→Va3・VIc→VIc・Vb→Vc→VIIと変化すると仮定する。

現在のところV c、VII式は沖縄の遺跡調査や民俗調査などでは報告例がなく、与論島のみで使用例が確認される。沖縄の事例は、その対象が埋蔵文化財の資料に偏るため近代までが一般的に調査対象で、戦後の調査例はほとんどなく確実ではないものの、V c及びVII式は火葬移行後、離島などに残る洗骨に伴い消費された可能性が高いと考えられる。

3. 分析属性の抽出

安里編年では蓋の検討は十分に行われておらず、また肩部の文様などについても貼付けや沈線などのいわゆる大きな変化は述べられているが、文様の盛衰についての詳細は検討されていない。厨子に描かれる文様意匠については、先行研究でも触れたように、下地安広・上原静の所見、那覇市の各報告書による詳細な分析がある。特にハタマチュウ古墓群、フクヅ山古墓群の細分案は参考になる(當舖2011・2019)。崎山古墓群なども文様分類(島2001)で詳細な検討が行われているが、これは全体を沈線文とする安里編年VI式の分類案となっており与論島の資料を分析対象とする本論では、V式とは全く関連しないとは考えられないものの今回は対象から外した。その理由として崎山古墓群は、厨子甕の銘書や文様などのバリエーションなどから、明治41～45年(1908～1912)の短期間に構築さ

れたユタ（呪術・宗教的霊能者）の関与する墓と評価されており、大きさも異なることから、与論島の厨子甕分析には比較し難いと判断した。

前項で紹介したように、沖縄出土厨子甕においては器形および屋門の形態や穿孔などから少なくとも Va1、Va2、Va3、Vb の少なくとも四分が可能と考えられたが、前浜墓地の事例では屋門が全てみえるわけではないため、再度与論島の前浜墓地の肩部の文様を抽出し、これを沖縄出土例と比較して検討を行う。これまでに肩部文様については、植物の葉や花等をモチーフに様式化したものであることが指摘（當銘2019: 119、ほか）され、与論島の例もその範疇で捉えられる。そこで、今回の主たる分析対象とする与論の厨子甕肩部文様を幾つかにグルーピングして、そのモチーフの描画方法などに着目しながら検討を行う。ここでは主な文様種類として4種の例を用いてみたい。

蓮華文（図4-1・2、以下括弧は図4を示す）：正面中央に蓮華文を横方向から見たいわゆる側視型で線刻される。花卉が重なるように描かれ、Va1（1）には蓮子が点刻され、正面蓮華文の左右には蓮子文が描かれる。Vb（2）ではこれが略化し正面の蓮華文のみの意匠となる。

沖縄の出土例（図5-〔1〕～〔3〕、以下亀甲括弧は図5を示す）が類例として挙げられ、IV式〔1〕とVa2〔2〕の文様が前者、Va2〔3〕は後者とモチーフや筆致が近く、前者が古式で後者が新式となり紀年銘もこれと整合する。紀年銘資料からおおよそ1930年代には略化すると暫定的に指摘しておく。

蓮華唐草文（3～6）：蓮華文とみられる花文が正面中央に略して描かれ、大振りの波状文が頸部を全周し、花文下部に茎、波状文の高まりの下部に沈線文がしばしば施される。Va1・2には少なく、Va3に多くみられ、特にVbではこれがほぼ占有する。Vcに描かれる同種の文様は匏彫りで、浅い沈線が描かれている。

沖縄の出土例〔4～6〕が類例として挙げられ、Va2〔4・5〕が又状工具、Va3〔6〕が櫛状工具でほぼ同じモチーフを描く。1920年代以降に登場する文様とみられ、前者が古式で後者が新式となり紀年銘もこれと整合する。出土例では確認できなかったものの、総じて並行しながらも又状工具→櫛状工具へと施文具が変化するものと推測される。

蓮弁文（7～11）：蓮弁様の意匠はいくつかの種類がある。蓮弁が重複しながらおおよそ葉文のような形で交差しながら葉脈状の沈線が描かれるもの（7～9）、垂下する蓮弁が交差しながら描かれるもの（10）、蓮弁が単独的に描かれるもの（11）などがある。与論島の事例では蓮弁を連続的に配し、縦方向の沈線で充填するものはVI式の例にみることができるとは充填される沈線に空白が多くなる。

沖縄の出土例では葉脈状のものがあるものの類例として、葉文のような形で交差しながら葉脈状の沈線が描かれるもの〔7～14〕と垂下する蓮弁が交差しながら描かれるもの〔15～19〕がある。前者はVa1〔7～9〕の文様は沈線が密に施されるものが多い。やや粗いVa1〔10〕もある。Va2〔11～14〕が蓮弁文の中の沈線が雑となる。後者の蓮弁文はIV式〔15〕やVa1〔16〕の文様は沈線が密に施されるもの、Va2〔17〕・Va3〔18〕・Vb〔19〕が蓮弁文の中の縦位沈線が垂下の弁頭まで届かず筆

致は雑となる。蓮弁に充填される文様の筆致が密なものと、粗なもので古・新となり、紀年銘もこれと整合する。紀年銘資料からおおよそ1910年前後に変化するものと暫定的に指摘しておく。

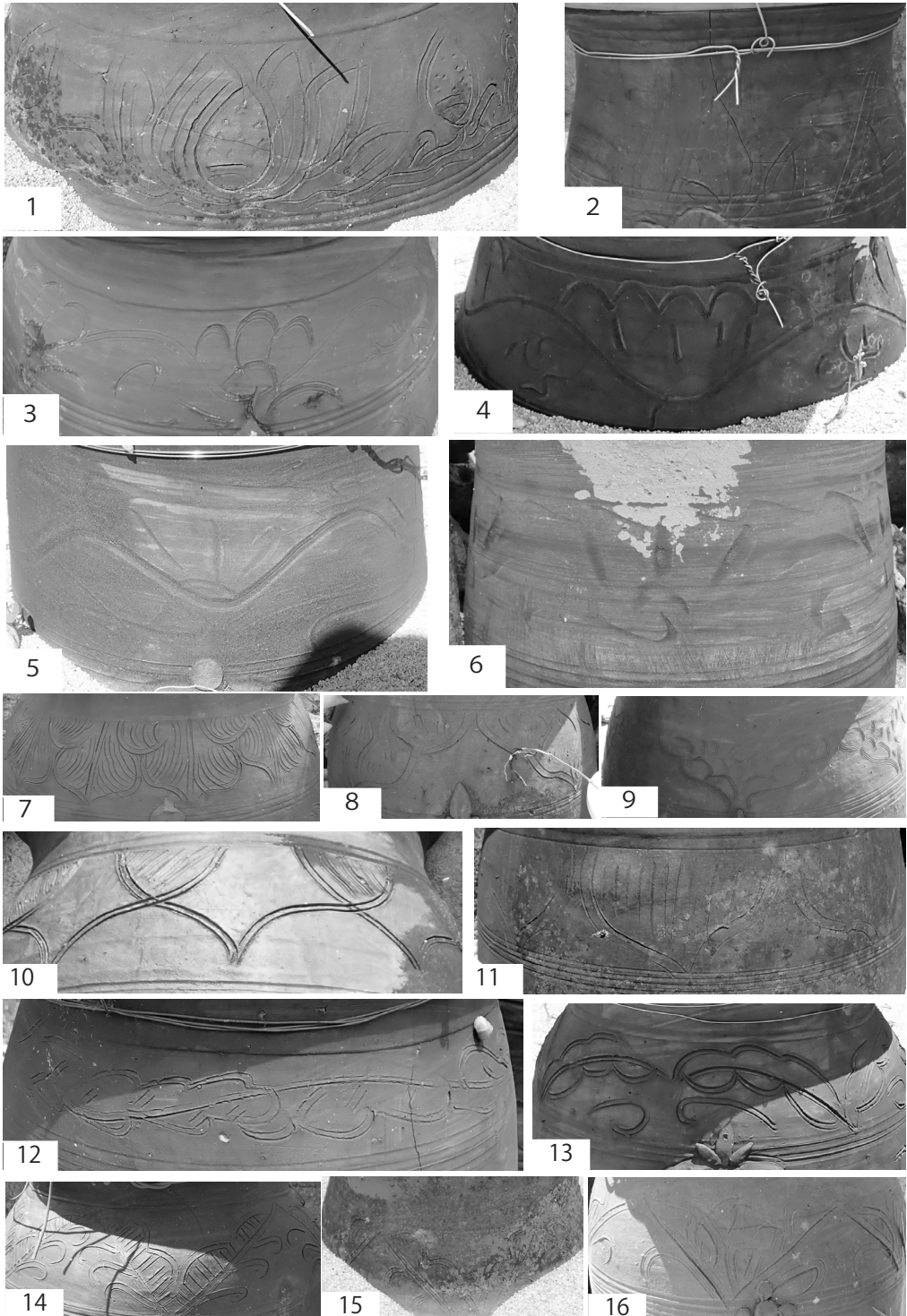


図4 与論島前浜厨子甕肩部文様一覧

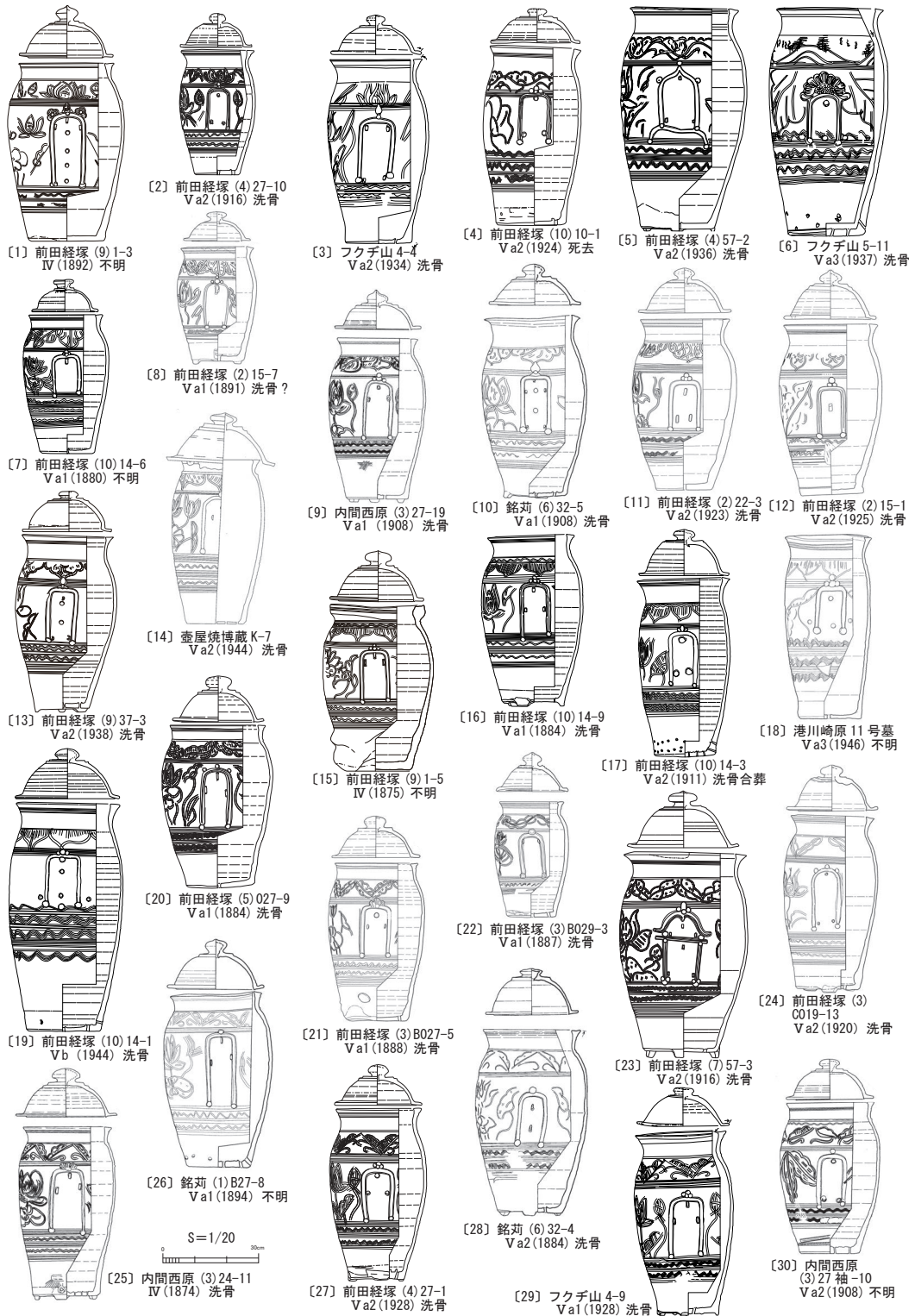


図5 沖縄の古墓出土の主な紀年銘厨子

葉文 (12～16)：鋸歯文に植物様の文様が描かれる。上下とも同じ文様で葉のモチーフと思われる文様が連続的に波状・鋸歯状に描かれるもの (14～16) と、上部に葉下部に蔓状のモチーフが描かれるもの (12・13) がある。

沖縄の出土例では葉文の類例として、〔20〕～〔30〕が類例として挙げられ、前者はVa1〔20～22〕、Va2〔23～24〕、後者はIV〔25〕、Va1〔26〕 Va2〔27～28〕となる。例示したものは、葉文に充填される文様の筆致に精粗の傾向があるように見受けられるもののそれほど明確ではない。〔28〕の紀年銘が古くなるがこれは蓋の紀年銘で身と不一致の可能性がある。これを除けば前者を参考に1910年前後に変化すると指摘しておく。

文様は、総じて叉状、櫛、篋状工具の三種が用いられ、肩部文様の施文に用いられるのは叉状工具が古く、櫛状工具が次いで、最終的には篋状工具の一条の線彫り描画へと変化する。また、その描画モチーフも、これに先行するⅢ式以前では、基本的には無文もしくは波状文や鋸歯文、稀に唐草文がみられるが、Ⅳ式以降に、蓮華、蓮弁文を主体に、植物の葉や花等をモチーフに様式化したものが描かれた。古い方は精緻に、新しくなるとやや粗放になる。戦前から戦後にかけては、そのモチーフの多くが蓮華文とみられる花文が正面中央に略して描かれ、大振りの波状が頸部を全周する。上記グループでいうところの、蓮華唐草文で占められるようになる。最終的にはその図案が分からないほど略化される。

4. 厨子甕製作に関する記録と聞き取り

与論島の古墓調査を共に進める町健次郎氏より、那覇市の有限会社沖縄陶器が与論島に出荷していたことをご教示いただいた。そこで、2022年9月15日沖縄陶器の社長城間豊氏を訪ね、厨子甕製作に関する多くの有用な情報をご提供いただいたので以下にこれを要約する。

沖縄陶器は戦前から続く会社で、城間氏は同社5代目の社長となる。1972年生まれで、23歳から沖縄陶器で働いていた。自身は与論島へ行ったことはなかったが、港まで商品を出荷したことがあるとされる。与論島の厨子甕の写真を確認していただいたところ、同社から出荷されたものであることのご教示を得た。

沖縄陶器の事務所には現在も製品が幾つか取り置かれており (図6)、本論Vcで釉薬の濃いものと同一のものであった。当該資料はガン釉と呼称している釉



図6 有限会社沖縄陶器所蔵の厨子甕

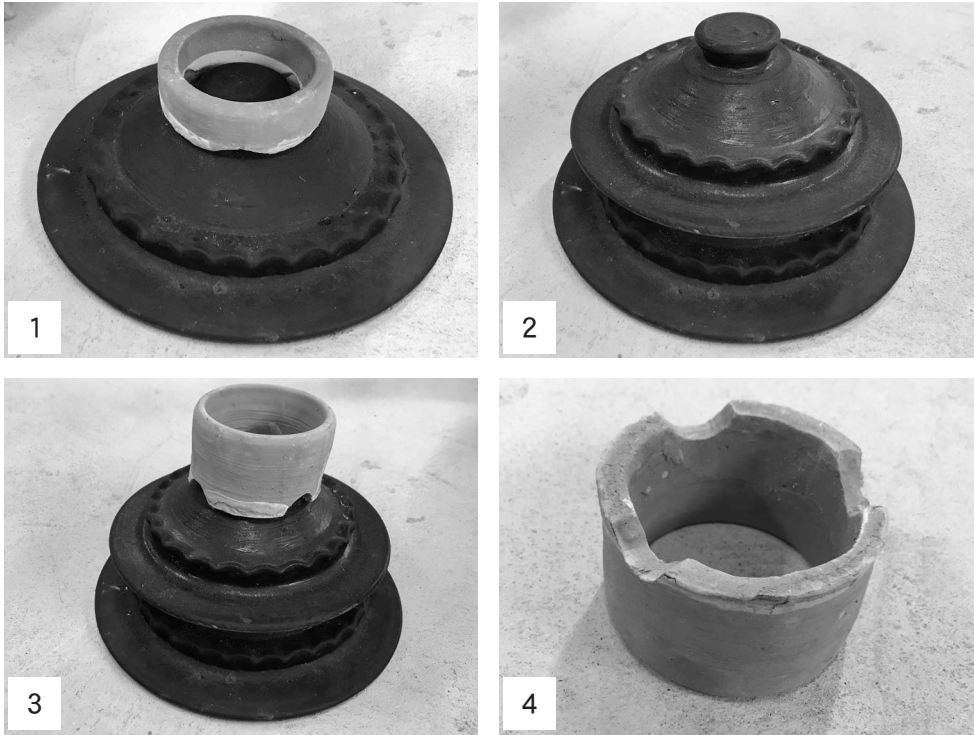


図7 有限会社沖縄陶器所蔵厨子甕蓋重ね焼き解説図

葉を施釉したものであるという。いわゆるマンガン釉と呼ばれるものと同じ意味だと思いうことであつた。ガン釉は、現在は工業製品で、これにシロタマ（荒焼の陶土）を溶かして施釉するという。実際の製作者としては高江洲康義^(註10)氏であることをご教示いただいた。

IV式・V式のマンガン釉の薄いタイプについても、城間氏によれば、古い時代のマンガンの施釉の特徴という。厚塗りの時代以前は、麻布でガン釉を雑に薄く施釉し登り窯で生産していたと聞かされていたという。土も耐火性の高い土で、はじくと金属音がする焼の良い製品がこれであるとされる。この製品は登り窯で生産していた昔ながらの製品とされる。

Vcのマンガン釉が厚く濃いタイプは、復帰後に生産されたもので、1,000度くらいまでしか耐えられない陶土を用いた製品とされる。ガン釉を刷毛などで厚く施釉し、灯油窯で生産していたそうである。壺屋は、公害問題で1974年を最後に登り窯の使用は途絶えた（那覇市壺屋焼物博物館2015）とされている。

このほかにも、蓋のについて古くは高さがあつたが、重ね焼きをするために高さを低くつくるようになったということもご教示いただいた。実際に重ね焼きの際に用いる筒状の焼台も手持ちのもので、これを再現いただいた（図7）。僧形の型の貼り付け文は、高江洲氏は当初無文としていたが、城間氏が提案して貼り付け文をするように進言したということであつた。倉庫には僧形の型などもあつたが、4年前の台風被害で倉庫が飛んだときに片づけたため無いということであつた。なお、高江洲氏

と城間氏では塗りに差があって、厚く施釉するのが城間氏自身で、高江洲氏はやや粗い塗りだったことなど資料観察において有意義な知見をご提供いただいた。

加えて、厨子甕づくりに関してはいくつか記録があるので、これを列記しておく。

昭和初期の荒焼呼称に関する調査が島袋まき子によって行われている。聞き取りによれば、石川喜進（大正9年生）は、代々荒焼を作る窯元の7代目で、幼いころより家業である荒焼づくりに携わったとされ、厨子甕に蓮の花などを装飾するのが日課だったという。また、厨子甕はタイリー（二人入り）とチュイリー（一人入り）、子ども用のものまでサイズがあったとされる。庇付マンガンの庇装飾はカーラー、蓮の花の装飾はハナファー、門の意匠はヤージョーと呼称されている。

カマチミ（窯詰）の際にはハナグチ（先端口）に近いところにタイリーが並べられ。高さの低いチュイリーはひっくり返して、口どうしが重なるように窯詰したという。同様の窯詰方法は、城間氏からも聞き取ることができた。また、天井が低い場所で厨子甕どうしを重ねられない場合は、ミズブザー（水鉢）などを重ねたり、入れたり、また小型のチュイリーをハンドゥーの中に入れることもあったとされる。（島袋2004）

南窯（ふえーぬかま）を含めた壺屋の登り窯は1970年代前半には煙の公害問題によって使用が停止されているが、南窯では、1990年に2回、1991年に1回、1992年に1回計4回イベント的な窯焚きが行われていたとされる（壺屋焼物博物館2015）。城間氏も南窯での窯焚きを40年くらい前までは窯で焼いていたと記憶されており、あるいはこのイベント的な窯焚きであった可能性もあると考えられる。

現在では、南窯では窯焚きが行われていない。窯の北側には、厨子甕が現在も積み置かれている（図8-1・2）。この場所はこれまでも多くの文献等で写真が紹介されてきた、今回の調査に伴い類例資料の調査として実見したところ、V b（図8-4・5）、V c（図8-6・7）が南窯北東側（図8-1）に完形のもので積み置かれ、窯北西側（図8-2）に植木鉢などとともにVI c（図8-3）の厨子甕が破片で積み重なるように集積されているのを確認された。北東側の製品は有限会社沖縄陶器でも見ることのできた製品で、北西側製品とはやや時期差がある可能性がある。このことから、V cは1970年代前半までの製作されたもので、V b、V cは1990年代のイベントで沖縄陶器が参加して製作されたものではないかと推測された。

5. 近現代マンガン細分編年

以上まとめると、V式はIV式に後続する。両者は肩部の突帯が沈線文に略化する点で型式を画する。V式の屋門はアーチ型を基本とするが、唐破風屋根が伴うものもみられる。さらにV式は屋門左右に沈線で蓮華文などの文様が施文されるV aと、無文のV b、僧形文が貼付けられるV cに分類される。なお、V cは沖縄諸島での出土例は確認されておらず、与論島前浜墓地で使用されている。有限会社沖縄陶器や南窯の物原で現存することを確認できることから、壺屋で生産されたものが与論に運ばれ、その年代もおおよそ復帰後まで続いたことを聞き取ることができた。V aは屋門及び周辺に配置され

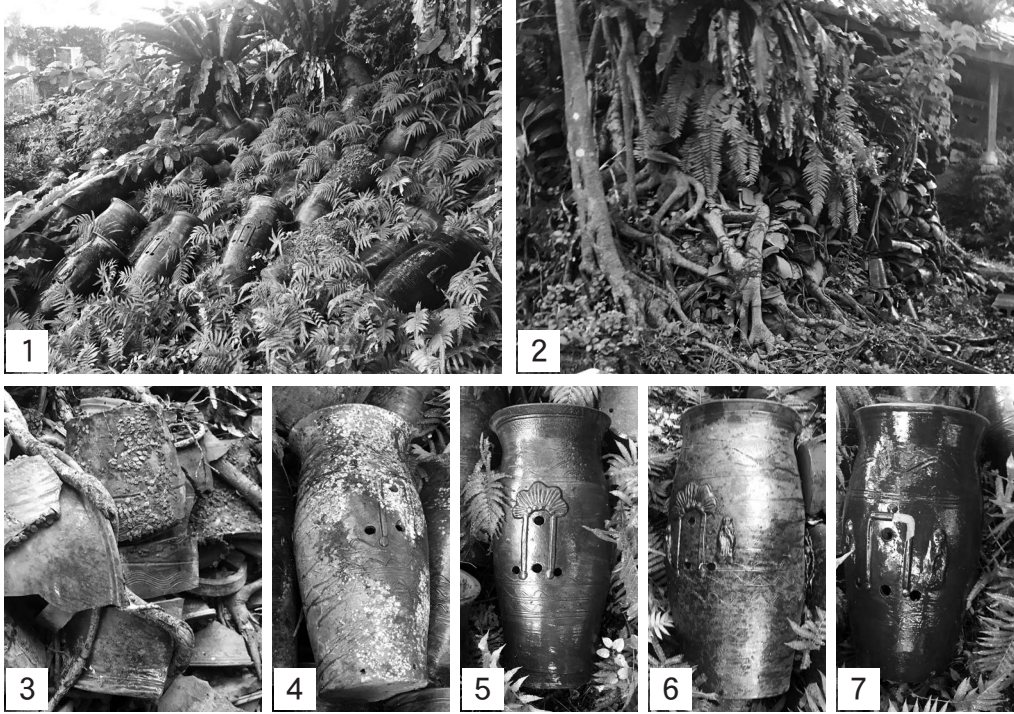


図8 南窯の厨子甕

る透かしによって、Va1、2、3の3種に分類した。

その年代観については、銘書、聞き取りなどの状況から、以下のようにまとめられる。

IV式：1850年代～1890年代（安里編年年代観）

V式：1890年代頃から1990年代まで

Va1：1890～1910年頃

Va2：1910～1940年頃

Va3：1930～1950年頃

Vb：1945年～1990年代（与論の現代墓アンケート結果を参照）

Vc：1970年代後半～2010年代（与論の現代墓アンケート結果を参照）

VI式：1930年以後（安里編年の年代観）

VII式：1990年代～現代（与論の現代墓アンケート結果を参照）

6. おわりに

御殿形厨子の編年（宮城2019・2020ab・2021・2022）に続き、本論では与論島の厨子甕理解のために、マンガンの近現代の例を取り上げ、型式学的考察を行った。これによって、IV式とVa1～3、Vb、Vc、VI式に分類し、戦前はIV-Va1・2、戦後のものはVa3、Vbがやや古式で、Vcはおおよそ1970年代（復帰後）と想定され1990年代にVII式にとってかわる。なお、VI式はVa3やVbにおおよそ併存すると考

えられた。

今後の課題として、本分析結果を実際に与論島の前浜墓地の厨子に当てはめて、民俗学調査とその結果を整合させて考察する。次回以降これに取り組みたい。

本論を執筆にあたり次の方々からご教示頂きまとめることができました。記して感謝申し上げます。Alexandra Garrigue、天久朝海、安和吉則、上原 静、鈴木 悠、高嶺よし乃、前田一舟、吉田健太、町健次郎、関根達人、高嶺愛奈、金城 翼、倉成多郎、城間豊、比嘉立広（五十音順敬称略）

付記：本稿は「奄美群島の葬墓制に関する考古学的研究」（基盤研究B、課題番号21H00589、研究代表：関根達人）の成果の一部である。

《補記》

現代陶器としての厨子甕製作については島袋常汪氏も沖縄陶器が与論に出荷して、繁盛していた様子を証言している（比嘉立広私信）。南窯の近くに店舗を構える「骨壺たかえす」など、壺屋の通り沿いには現在も厨子甕を販売しており、厨子甕が店頭に並んでいる。

《注釈》

- 註1. 奄美群島の葬墓制に関する考古学的研究（代表：関根達人。基盤研究B、課題番号21H00589）
- 註2. 確認されていないが、正確には十分な検証が行えていないという点もある。本墓は現在も参拝されることから、調査時に蓋を持ち上げて裏を観察するなどのことは行っていない。ただし、そこに記名するような慣習があったという記録もないため、沖縄の銘書のようなものは無いと推量される。
- 註3. 上江洲均は「型」を用いているが、型式学の形式に相当するものと考え、本論では形式で呼称を統一する。
- 註4. 前浜墓地は、東と西があって、表札には西前浜墓地（昭和五十三年）、前浜東霊苑（昭和四九年）と記載されている。
- 註5. 竹内浩2022年8月20日「与論島の古墓を考える」『与論郷土研究会』（於：城公民館）口頭発表を参考。調査当日に開催された研究会にて、多くのご教示いただいた。他にも論文として、赤田1993、金城2007、近藤2004、津波2007などがある。
- 註6. 写真測量は2022年2月に行われ、この際に甕が埋設されていたが、2022年8月20日調査時点の個数となっている。
- 註7. 全ての厨子が埋設されているわけではない。改葬されたものも含まれている。
- 註8. フクヂ山古墓群の第8-1号墓1号厨子など。報告書では火葬用骨壺として報告される（當銘2019）。

註9. 紀年銘は最新年を基準年としている。

註10. 高江洲康義（1932年～2004年）学校を卒業後、16歳で沖縄陶器株式会社（沖陶）へ入社し、それからなくなるまで職人として荒焼の製作を続けた。公害問題などで壺屋の南窯が火を止めるまで、同窯で荒焼の製品を数多く生産した陶工の一人である（壺屋焼物博物館2008: 19）。他に、城間氏の話では、島袋秀正（シウセイ）・秀雄（ヒデオ）の兄弟も青釉の製品をつくっていたと言う。なお、島袋兄弟の父秀満（1903年～1997年）は代々荒焼陶工の家に生まれ、17代目とされる。終戦後沖縄陶器株式会社に入社、甕、花鉢、厨子甕、シーサー、火鉢、カラカラ等の製品を作ったとされる。特に壺、甕、花鉢などの大物を得意とし、口の部分を厚く作るのが特徴だったという（壺屋焼物博物館2008: 2）。

《参考文献》

- 赤田光男1993「与論島の洞穴墓と改葬習俗」『国立歴史民俗博物館研究報告』（49）国立歴史民俗博物館pp.323-347
- 安里 進2006「伊是名玉御殿の考古学的調査」『首里城研究』第9号 首里城公園友の会pp.30-46
- 安里 進1997『伊祖の入れ御拝領墓の厨子甕と被葬者—近世墓の考古学的調査による家族復元—』浦添市教育委員会
- 上江洲均1980「沖縄の厨子甕」『日本民族文化とその周辺歴史・民族篇』新日本教育図書pp.341-374
- 上江洲均1981「沖縄の厨子甕」『日本常民文化研究所調査報告』第8集 日本常民文化研究所pp.109-48
- 浦添市教育委員会2014『前田・経塚近世墓群5』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター（編）2022『普天間石川原第一遺跡普天間グスクニー遺跡普天間下原古墓群』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第111集
- 加藤正春2004「火葬と沖縄の葬儀—火葬導入による葬儀の再編成とその外部化」『生活文化研究所年報』17pp.87-113（『奄美沖縄の下層と葬墓制—変容と持続—』榕樹書林2010: 再録）
- 金城 善2007「与論島の墓制を訪ねて」『沖縄民俗研究』（25） 沖縄民俗学会pp.67-74
- 倉成多郎2005「厨子甕の製作について」『那覇市立壺屋焼物博物館紀要』第6号 那覇市立壺屋焼物博物館pp.1-8
- 栗山初美2005「沖縄出土の焼物について—銘苺古墓群・ナーチャー毛古墓群出土の蔵骨器を中心として—」『那覇市立壺屋焼物博物館紀要』第6号 那覇市立壺屋焼物博物館pp.9-50
- 近藤功行2004「与論島における洗骨習俗の現状」『志學館法学』5（1） 志學館大学法学部pp.213-241
- 島 弘2001「まとめ」『首里崎山古墓群』那覇市文化財調査報告第47集 那覇市教育委員会pp.73-76
- 島袋まき子2004「荒焼の呼称について—陶工からの聞き取りをもとに—」『那覇市壺屋焼物博物館紀要』第5号 那覇市立壺屋焼物博物館pp.1-13
- 下地安広・上原静ほか1985『チヂフチャー古墓群調査報告書』浦添市文化財調査報告書第8集 添市

教育委員会

- 西銘 章・ほか2011『ヤッチのガマカンジン原古墓群』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第6集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 津波高志2007「琉球列島の洗骨改葬-与論島の事例を中心に-」『韓国珍道学会論文集』pp.111-144
- 當銘由嗣2011「蔵骨器」『首里区場川ハタマチュウ古墓群』那覇市文化財調査報告書第84集 那覇市教育委員会pp.35-83
- 當銘由嗣2019「蔵骨器」『フクヂ山古墓群』那覇市文化財調査報告書第109集 那覇市市民文化部文化財課pp.117-152
- 中村 愿1989「墓の形態と厨子甕のタイプについて」『シンポジウム南島の墓—沖縄の葬制・墓制』沖縄県地域史協議会pp.26-39
- 那覇市教育委員会1998『銘苺古墓群（I）』那覇市文化財調査報告第39集
- 那覇市立壺屋焼物博物館（編）2008『平成19年度那覇市立壺屋焼物博物館企画展壺屋陶工遺作展～歴史と伝統に育まれた陶工達の技』
- 那覇市立壺屋焼物博物館（編）2014『沖縄宗教藝術の精華厨子門上秀叡・千恵子コレクション収蔵記念報告書』
- 那覇市立壺屋焼物博物館（編）2015『平成27年度那覇市立壺屋焼物博物館企画展現代沖縄陶芸の歩み』
- 樋口麻子2007「蔵骨器」『銘苺古墓群（VII）』那覇市文化財調査報告第73集 那覇市教育委員会pp.39
- 宮城弘樹2019「御殿形厨子の研究（1）—紀年銘資料の集成を中心として—」『南島考古』No.38 沖縄考古学会pp.1-20
- 宮城弘樹2020a「御殿形厨子の研究（2）—赤焼・荒焼御殿形厨子の編年—」『南島考古』No.39 沖縄考古学会pp.115-126
- 宮城弘樹2020b「御殿形厨子の研究（3）—上焼御殿形厨子の編年—」『総合学術研究紀要』第22巻第1号 沖縄国際大学総合学術研究会pp.23-39
- 宮城弘樹2021「御殿形厨子の研究（4）—陶製御殿形厨子の底孔に着目して—」『那覇市立壺屋焼物博物館紀要』第22号 那覇市立壺屋焼物博物館pp.1-10
- 宮城弘樹2022「御殿形厨子の研究（5）—石灰岩・サンゴ石厨子の編年—」『総合学術研究紀要第23巻第2号 沖縄国際大学総合学術研究会pp.1-30
- 宮城弘樹（編）2020a『琉球葬墓制資料集成（1）—厨子（蔵骨器）編—』沖縄国際大学考古学研究室
- 宮城弘樹（編）2020b『琉球葬墓制資料集成（2）—銘書編—』沖縄国際大学考古学研究室
- 吉田健太2013「門上秀叡・千恵子コレクション」における厨子溶着煙管の検討『那覇市立壺屋焼物博物館紀要』第14号 那覇市立壺屋焼物博物館pp.61-71
- 吉田健太2015「甕型厨子における近世紀年銘資料」『壺屋焼物博物館紀要』第16号 那覇市立壺屋焼物博物館pp.33-52

付表 本論対象の主な紀年銘厨子一覧表

図5	遺跡名	墓番号	蔵骨No	図番号	型式	最古紀年		最新紀年			記銘部位	集成(2) No	集成(1) 報告書No
						銘書	西暦	銘書	西暦	死去洗骨			
1	前田経塚(9)	1	3	10図1,2 図版32-5,6	IV	光緒18	1892	光緒18	1892	不明	蓋	2752	40
2	前田経塚(4)	27	10	47図131,132 図版23	Va2	戊	1910 ?	大正05	1916	洗骨	蓋	2407	35
3	フクヂ山	4	4	63図5,6 図版70-8,9	Va2	昭和03	1928	昭和09	1934	洗骨	蓋	1918	29
4	前田経塚(10)	10	1	30図図版28 136,137	Va2	大正07	1918	大正13	1924	死去	蓋	2836	41
5	前田経塚(4)	57	2	78図271,272 図版32	Va2	昭和05	1930	昭和11	1936	洗骨	蓋	2454	35
6	フクヂ山	5	11	64図5 図版73-5	Va3	昭和10	1935	昭和12	1937	洗骨	蓋	1935	29
7	前田経塚(10)	14	6	43図図版43 223,224	Va1	光緒06	1880	光緒06	1880	不明	蓋	2864	41
8	前田経塚(2)	15	7	20図35,36 図版25	Va1	光緒17	1891	光緒17	1891	洗骨力	蓋	2270	33
9	内間西原(3)	27	27-19	50図27-19	Va1	明治37	1904	明治41	1908	洗骨	蓋身	3016	50
10	銘苅(6)	32	5	47図2	Va1	明治41	1908	明治41	1908	洗骨	蓋	1033	5
11	前田経塚(2)	22	3	32図84,85 図版31	Va2	大正12	1923	大正12	1923	洗骨	蓋	2281	33
12	前田経塚(2)	15	1	19図24,25 図版24	Va2	大正11	1922	大正14	1925	洗骨	蓋	2265	33
13	前田経塚(9)	37	3	63図3,4 図版48-6,7	Va2	昭和13	1938	昭和13	1938	洗骨	蓋	2785	40
14	壺屋焼博	館藏品	K-7	p 217,218	Va2	昭和07	1932	昭和19	1944	洗骨	蓋身	4367	143
15	前田経塚(9)	1	5	11図1,2 図版33-1,2	IV	光緒01	1875	光緒01	1875	不明	蓋	2753	40
16	前田経塚(10)	14	9	44図図版43 229,230	Va1	光緒10	1884	光緒10	1884	洗骨	蓋	2867	41
17	前田経塚(10)	14	3	43図図版43 217,218	Va2	明治44	1911	明治44	1911	洗骨 合葬	蓋	2861	41
18	港川崎原	11	-	37図2 図版25-2	Va3	1946	1946	1946	1946	不明	身	3124	60
19	前田経塚(10)	14	1	43図図版43 213,214	5b	昭和19	1944	昭和19	1944	1944	蓋身	2860	41
20	前田経塚(5)	027	9	23図49,50 図版23	Va1	光緒01	1875	光緒10	1884	洗骨	蓋	2490	36
21	前田経塚(3)	B-027	5	12図10,11 図版23	Va1	光緒14	1888	光緒14	1888	洗骨	蓋身	2287	34
22	前田経塚(3)	B-029	3	14図5,6 図版24	Va1	光緒13	1887	明治20	1887	洗骨	蓋	2291	34
23	前田経塚(7)	57	3	35図5,6 図版29-1,2	Va2	明治45	1912	大正05	1916	洗骨	蓋	2719	38
24	前田経塚(3)	C-019	13	40図22,23 図版44	Va2	大正06	1917	大正09	1920	洗骨	蓋	2343	34
25	内間西原(3)	24	24-11	39図24-11	IV	同治11	1872	同治13	1874	洗骨	蓋	3000	50
26	銘苅(1)	B27	8	80図4,5 PL.25-4,5	Va1	光緒20	1894	光緒20	1894	不明	蓋	34	1
27	前田経塚(4)	27	1	44図113,114 図版23	Va2	昭和03	1928	昭和03	1928	洗骨	蓋	2398	35
28	銘苅(6)	32	4	48図1	Va2	光緒10	1884	光緒10	1884	洗骨	蓋	1032	5
29	フクヂ山	4	9	64図1,2 図版71-5,6	Va1	昭和03	1928	昭和03	1928	洗骨	蓋	1923	29
30	内間西原(3)	27	27袖10	58図27袖-10	Va2	明治41	1908	明治41	1908	不明	蓋身	3034	50

※紀年銘が1つのものは、最古最新の両方に記載した。

Research on unerary Urns (*zushigame*) [1]

– Chronology for the Funerary Urns of the Modern and Contemporary Periods –

Hiroki MIYAGI

Abstract

Most of the funerary urns (*zushigame*) in use in the Modern and Contemporary Period cemeteries of Yoron Island have likely been produced in the Tsuboya Kilns of Naha City in Okinawa Prefecture. The author conducted a study of the funerary urns of Yoron Island.

This article aims at the establishment of a chronology for the Modern and Contemporary Period funerary urns of Yoron Island.

It focuses on the joint study of funerary urns mentioning a date in their funerary inscription that had been reported in Okinawa and funerary urns from Yoron Island.

The study also included interviews that were conducted with potters who used to sell funerary urns in Yoron Island. The results presented permitted to refine or complete pre-existing funerary urn typologies of the Modern Period, encompassing funerary urns produced in Tsuboya between the 1890' s and nowadays.